

# Suburbia Records Showcase

for INSENSE MUSIC WORKS



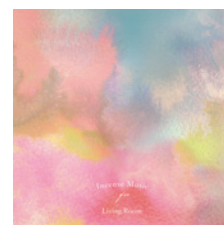
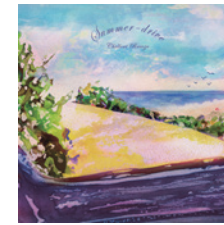
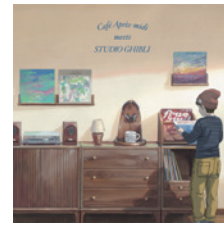
Compiled by Toru Hashimoto for 渋谷カルチャー考現学

NOT FOR SALE

## Suburbia Records Showcase for INSENSE MUSIC WORKS

01. 曾我部恵一 / やさしさに包まれたなら  
from 「カフェ・アプレミディ・ミーツ・スタジオ・ジブリ」 (IMWCD-1832)
02. カジヒデキ / Summer Girl  
from 『Summer-drive Chillout Breeze』 (IMWCD-1780)
03. 矢舟テツロー / Haven't We Met  
from 『Interior Music ~Café Après-midi ACME Furniture』 (IMWCD-1706)
04. Uyama Hiroto / Moon Child  
from 『Incense Music for Bed Room』 (IMWCD-1614)
05. TAMTAM / Sweet Cherry  
from 『Seaside Chillout Breeze』 (IMWCD-1674)
06. 巨勢典子 & haruka nakamura / I Miss You (Mellow Beats Mix)  
from 『Sunset Chillout Breeze』 (IMWCD-1677)
07. Calm / Persian Love  
from 『Incense Music for Living Room』 (IMWCD-1629)
08. YAKENOHARA / Peace Piece  
from 『Incense Music for Dining Room』 (IMWCD-1630)
09. haruka nakamura / soiree (take 3)  
from 『Incense Music for Bed Room』 (IMWCD-1614)
10. 武田吉晴 / Montara  
from 『Incense Music for Living Room』 (IMWCD-1629)

Compiled by Toru Hashimoto for 渋谷カルチャー考現学  
Artwork & Design by FJD



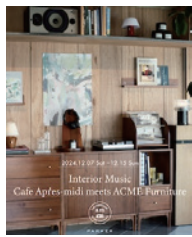
INSENSE MUSIC WORKS INC.  
<https://www.insense.co.jp/>

## 橋本徹 (SUBURBIA) が語る原知章・著「渋谷カルチャー考現学」ができるまで (前編)

橋本徹 (SUBURBIA) × 柿澤樹希也 (DU BOOKS)

柿澤：まずは早稲田大学教授で文化人類学者の原知章先生と、橋本さんが知り合った経緯から教えていただけますか？

橋本：2024年11月にカフェ・アプレミディが25周年を迎えて、ほぼ同タイミングでBAYCREW'Sのインテリア・ブランドACME Furnitureと、家具やインテリア小物を共同開発して、ダブルネーム・コンビ [Interior Music ~Café Après-midi meets ACME Furniture] もリリースしたコラボ・プロジェクトがローンチしたんですね。それを記念して12月に、新宿御苑の素敵なセレクトショップ&カフェ PARKERで、“香りと音楽とインテリアと飲食”のマリアージュをテーマに、心安らぎリラックスできる空間演出を実現した「Interior Music」フェアを開催したんですけど、そこに2日続けて原先生が足を運んでくださったんです。



柿澤：それをきっかけに親交を深めていったと……

橋本：はい。もともと僕の選曲や編集・著作物には親しんでくださっていたそうなんですが、ちょうどその時期に「シブヤ文化漂流記」と題された、結構大きな反響を呼んだ僕のロング・インタビュー記事がウェブ公開されて、それを読まれて、環境民俗学を専門とする原先生は、いろいろとアイデアが生まれてきたんですね。年が明けてすぐ、早稲田大学で「渋谷カルチャープロジェクト」を発足させたいので、ご協力いただけないでしょうかと話をいただいた。2025年度から大学の講演会やゼミの招聘講師をお願いしたいというオファーもそのときでした。



柿澤：橋本さんはそれまでに、教育の現場に携わられた経験はあったんでしょうか？  
橋本：もう20年以上前ですが、カフェ・アプレミディを始めてまもない頃に慶應義塾大学の文学部で講師を務めたことはありましたが、ほとんどないと言っていいですね。ただ原先生は僕と同じで、思いついたら行動が早くて、すぐに一連のプロジェクトのネットワークをPARKERで知り合ったFJD (藤田二郎) に頼んで、2月には原知章研究家のウェブサイトが「Interior Music ~Café Après-midi meets ACME Furniture」関連の5種のジャケットをモチーフにしたデザインに変わって、「渋谷カルチャープロジェクト」のローンチ・フライヤーやロゴも完成していました。柿澤：さすが早いんですね (笑)。

橋本：気持ちが乗って、心が加速していたんでしょうね。お会いすると目が輝いてましたから (笑)。3月上旬に「渋谷カルチャープロジェクト」のキックオフ・パーティーを兼ねた、学生だけでなく全国からOB・OGも集まった原ゼミの25周年を祝う懇親会があって、僕とFJDも出席してご挨拶したんですが、その前には「橋本さんのこれまでの人生についてインタビューして、「編集による文化の創造」という観点から本を作らせてもらえませんか？」というメッセージをいただきました。

柿澤：その時点ですでに、今回の書籍のアイデアは出ていたんですね。

橋本：はい。「音楽は好きだけど、CDやレコードは買ったことがなく、“渋谷系”という言葉も知らないような、デジタル・ネイティブ世代の学生たちに、ネットが普及する以前の“街”や“モノ”を通した人と人のつながりについて考えてもらうきっかけになればと考えています」という原先生の言葉にも、僕は心動かされたんですけど、まずは5/15に開催が決まっていた講演会に向けて集中して、それが終わったら本のごも前向きに考えましようと思返したのを憶えています。



柿澤：橋本さんとしても、その話はもちろん嬉しかったんですね？

橋本：そうですね。自分の過去を振り返ることが、未来への原動力になったりすることが多いと、最近よく感じていましたから、とてもありがたい話だなと思いました。

柿澤：そして新年度が始まって……

橋本：4月に初授業で所沢キャンパスに行ったのを機に、俄然5/15の講演会「渋谷文化漂流史」に向けて気持ちが乗っていききましたね。自分の人生や作品も振り返りながら、渋谷という街の文化や歴史を自分でも学んでいける楽しさもあって。講義のテーマ〜キーワードを掲載したフライヤーも功を奏したのか、講演会「渋谷文化漂流史」は大盛況・大好評で、その成功体験は間違いなく今回の書籍の礎というか、強力なエンジンになっていますね。出席できなかった方たちからの、講義の内容がわかるような資料を閲覧できないかという問い合わせも多くて、FJDが制作してくれた僕の書いたレジュメのスライドもPDFダウンロードできるようにしたら、やはり大反響で。何かこういことが求められている実感を得られたというか。

柿澤：そういう流れの中で、いよいよ本の制作へと向かっていくわけですね。

橋本：はい。6月に入ってすぐ、僕の自信としても読める評伝的な単行本をという正式オファーを改めていただき、ファースト・ミーティングを開きました。僕は特に「人間科学者が綴る橋本徹 (SUBURBIA) 論」というコンセプトに惹かれましたね。僕のライフ・ヒストリーをたどることで「好きなことを仕事に生きていくことへのヒントになれば」という言葉にも。というのも、まさにそれこそが、講演会の後に話しかけられた学生たちとの会話でも、その頃カフェ・アプレミディに僕のインタビューにやってきた原ゼミの3年生たちとのふれあいの中でも、最大のテーマでしたので。

柿澤：やっぱり社会に出る直前の彼らにとって、最大の関心事のひとつはそこでしたか。

橋本：ええ。僕自身もちょうど、青山学院大学の副学長を務めた父方の従兄についての新聞記事を読んだばかりで、自分も社会や後進に貢献できる仕事もできたらと思い始めていた頃でしたので、心に響いたんですね。あとは打ち合わせで原先生が考案した“シティ・カルチャー”という言葉も、“考現学”という概念とともに僕にとって存在感を増していって、本の大切なテーマになったと思います。

柿澤：それは「渋谷カルチャー考現学」という書籍のタイトルにも反映されてますね。本文を構成するうえで、オーラル・ヒストリー (口述歴史) の手法を採られた理由は、何かあったんですか？

橋本：実は僕は当初は、自分のインタビューでの発言を引用しながら、原先生が地の文で評伝を書かれるのかなとイメージしていたんですが、オーラル・ヒストリーは近年、環境民俗学の分野でもとても評価の高まっている研究方法だそう。もともと歴史的な出来事や経験者・関係者に直接インタビューして、その証言を記録・保存・分析することで、より立体的・多面的な理解のために活用されるスタイルですが、学術的な価値を担保する意味合いだけでなく、今回は読者にとっての読みやすさという面でも、プラスとなる判断・選択だったと編集者的な視点でも思います。若い読者や論文を読み馴れていない方にもフレンドリーですし、様々な分野・話題へも脱線して会話が広がりやすく、“連想ゲーム”を深めやすいです。

柿澤：ライフ・ヒストリー〜ライフ・ストーリーというフォーマットも原先生のこだわりだったんでしょうね。

橋本：そうですね。だからインタビューの最初の頃は、記憶をクロノジカルにたどって話すことができてなくて大変でした。どうしても記憶や感情は年代を前後したり、時間をとびこえて行き来してしまうものなので。原先生に何度も年月や時系列を丹念に確認されて、インタビューを重ねるうちに鍛えられましたけど (笑)。

柿澤：DU BOOKSを版元に選んでいたたいきさつについても、おうかがいできたらと思いますが……

※このインタビューの続きは、「Suburbia Suite presents 渋谷カルチャー考現学」と題して新たに制作されたZINEでお読みいただけます。

## 橋本徹 (SUBURBIA) が語る原知章・著『渋谷カルチャー考現学』ができるまで (前編)

橋本徹 (SUBURBIA) × 柿澤樹希也 (DU BOOKS)

柿澤：まずは早稲田大学教授で文化人類学者の原知章先生と、橋本さんが知り合った経緯から教えていただけますか？

橋本：2024年11月にカフェ・アプレミディが25周年を迎えて、ほぼ同じタイミングでBAYCREW'Sのインテリア・ブランドACME Furnitureと、家具やインテリア小物を共同開発して、ダブルネーム・コンビ『Interior Music ~ Cafe Apres-midi meets ACME Furniture』もリリースしたコラボ・プロジェクトがローンチしたんですね。それを記念して12月に、新宿御苑の素敵なセレクトショップ&カフェ PARKERで、“香りと音楽とインテリアと飲食”のマリアージュをテーマに、心安らぎリラックスできる空間演出を実現した「Interior Music」フェアを開催したんですけど、そこに2日続けて原先生が足を運んでくださったんです。

柿澤：それをきっかけに親交を深めていったと……

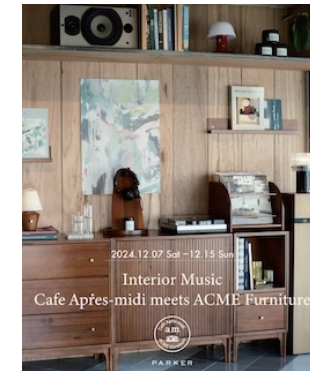
橋本：はい。もともと僕の選曲や編集・著作物には親しんでくださっていたそうなのですが、ちょうどその時期に「シブヤ文化漂流記」と題された、結構大きな反響を呼んだ僕のロング・インタビュー記事がウェブ公開されて。それを読まれて、環境民俗学を専門とする原先生は、いろいろとアイデアが生まれてきたんでしょうね。年が明けてすぐ、早稲田大学で「渋谷カルチャープロジェクト」を発足させたいので、ご協力いただけないでしょうかと話をいただいて。2025年度から大学での

講演会やゼミの招聘講師をお願いしたいというオファーもそのときでしたね。

柿澤：橋本さんはそれまでに、教育の現場に携わられた経験はあったんでしょうか？

橋本：もう20年以上前ですが、カフェ・アプレミディを始めてまもない頃に慶應義塾大学の文学部で講師を務めたことはありましたが、ほとんどないと言っていいですね。ただ原先生は僕と同じで、思いついたら行動が早くて、すぐに一連のプロジェクトのアートワークをPARKERで知り合ったFJD（藤田二郎）に頼んで、2月には原知章研究室のウェブサイトが『Interior Music ~ Cafe Apres-midi meets ACME Furniture』関連の5種のジャケットをモチーフにしたデザインに変わって、「渋谷カルチャープロジェクト」のローンチ・フライヤーやロゴも完成していました。

柿澤：さすが素早いんですね（笑）。



橋本：気持ちが乗って、心が加速していたんでしょうね。お会いすると目が輝いてましたから（笑）。3月上旬に「渋谷カルチャープロジェクト」のキックオフ・パーティーを兼ねた、学生だけでなく全国からOB・OGも集まった原ゼミの25周年を祝う懇親会があって、僕とFJDも出席してご挨拶したんですが、その前には「橋本さんのこれまでの人生についてインタビューして、“編集による文化の創造”という観点から本を作らせてもらえませんか？」というメッセージをいただきました。

柿澤：その時点ですでに、今回の書籍のアイデアは出ていたんですね。

橋本：はい。「音楽は好きだけど、CDやレコードは買ったことがなく、“渋谷系”という言葉も知らないような、デジタル・ネイティブ世代の学生たちに、ネットが普及する以前の“街”や“モノ”を通した人と人のつながりについて考えてもらうきっかけになればと考えています」という原先生の言葉にも、僕は心動かされたんですけど、まずは5/15に開催が決まっていた講演会に向けて集中して、それが終わったら本のことも前向きに考えましようと思事したのを憶えています。




柿澤：橋本さんとしても、その話はもちろん嬉しかったんですね？

橋本：そうですね。自分の過去を振り返ることが、未来への原動力になったりすることが多いのと、最近よく感じていましたから、とてもありがたい話だなと思いましたね。

柿澤：そして新年度が始まって……

橋本：4月に初授業で所沢キャンパスに行ったのを機に、俄然5/15の講演会「渋谷文化漂流史」に向けて気持ちが乗っていききましたね。自分の人生や作品も振り返りながら、渋谷という街の文化や歴史を自分でも学んでいける楽しさもあって。講義のテーマ~キーワードを掲載したフライヤーも功を奏したのか、講演会「渋谷文化漂流史」は大盛況・大好評で、その成功体験は間違いなく今回の書籍の礎というか、強力なエンジンになっていますね。出席できなかった方たちからの、講義の内容がわかるような資料を閲覧できないかという問い合わせも多くて、FJD が制作してくれた僕の書いたレジュメのスライドも PDF ダウンロードできるようにしたら、やはり大反響で。何かこういことが求められてる実感を得られたというか。

  
Shibuya Culture Project

早稲田大学 presents 橋本徹 (SUBURBIA) 講演会  
「渋谷文化漂流史」

早稲田大学・原知章研究室とカフェ・アプレミディの25周年記念コラボ企画「渋谷カルチャープロジェクト」の活動のひとつであり、環境民俗学の講義の一環として5/15に開かれる、橋本徹 (SUBURBIA) の講演会「渋谷文化漂流史」。

街全体が文化のテーマパークのように活発な消費とコミュニケーションの場となり、90年代にはその発信が世界的にも注目を集めた渋谷カルチャーの半世紀にわたる積層を、多角的に掘りさげながらもひといていくこの講演会は、学生以外の一般の方もご自由に無料で受講していただけますので、以下のようなテーマ~キーワードに関心のある方は、ぜひご参加ください。

- ・引用(参照)と編集(再構築)をまじえたサンプリング~カット&ペースト的「渋谷系」クリエイティブの本質
- ・PARCOの文化イメージ戦略と「すれちがう人が美しい——渋谷公園通り」の感性創造経済
- ・「文化と一線に遡る街」でセレクトとエディットのセンス・エリートたちが花開いた90年代の「世界同時渋谷化」
- ・「世界一の音楽の街」とミニシアター文化や渋谷カジに見出せるユース・カルチャーの同時代性
- ・個人オーナーの趣味性や美意識が反映された東京カフェ・スタイルの誕生とカフェ・ミュージック

柿澤：そういう流れの中で、いよいよ本の制作へと向かっていくわけですね。

橋本：はい。6月に入ってすぐ、僕の自伝としても読める評伝的な単行本をという正式オファーを改めていただき、ファースト・ミーティングを開きました。僕は特に「人間科学者が綴る橋本徹（SUBURBIA）論」というコンセプトに惹かれましたね。僕のライフ・ヒストリーをたどることで「好きなことを仕事に生きていくことへのヒントになれば」という言葉にも。というのも、まさにそれこそが、講演会の後に話しかけられた学生たちとの会話でも、その頃カフェ・アプレミディに僕のインタビューにやってきた原ゼミの3年生たちとのふれあいの中でも、最大のテーマでしたので。

柿澤：やっぱり社会に出る直前の彼らにとって、最大の関心事のひとつはそこでしたか。

橋本：ええ。僕自身もちょうど、青山学院大学の副学長を務めた父方の従兄についての新聞記事を読んだばかりで、自分も社会や後進に貢献できる仕事もできたらと思い始めていた頃でしたので、心に響いたんですね。あとは打ち合わせで原先生が考案した“シティ・カルチャー”という言葉も、“考現学”という概念とともに僕にとって存在感を増していった、本の大切なテーマになったと思います。

柿澤：それは『渋谷カルチャー考現学』という書籍のタイトルにも反映されていますね。本文を構成するうえで、オーラル・ヒストリー（口述歴史）の手法を採られた理由は、何かあったんですか？

橋本：実は僕も当初は、自分のインタビューでの発言を引用しながら、原先生が地の文で評伝を書かれるのかなとイメージしていたんですが、オーラル・ヒストリーは近年、環境民俗学の分野でもとても評価の高まっている研究手法だそうで。もともと歴史的な出来事の実験者・関係者に直接インタビューして、その証言を記録・保存・分析することで、より立体的・多面的な理解のために活用されるスタイルですが、学術的な価値を担保する意味合いだけでなく、今回は読者にとっての読みやすさという面でも、プラスとなる判断・選択だったと編集者の視点でも思います。若い読者や論文を読み馴れていない方にもフレンドリーですし、様々な分野・話題へも脱線して会話が広がりやすく、“連想ゲーム”を深めやすいですから。

柿澤：ライフ・ヒストリー～ライフ・ストーリーというフォーマットも原先生のこだわりだったんでしょうね。

橋本：そうですね。だからインタビューの最初の頃は、記憶をクロノジカルにたどって話すことができなくて大変でした。どうしても記憶や感情は年代を前後したり、時間をとびこえて行き来してしまうものなので。原先生に何度も年月や時系列を丹念に確認されて、インタビューを重ねるうちに鍛えられましたけど（笑）。

柿澤：DU BOOKSを版元を選んでいただいたいきさつについても、おうかがいできたらと思いますが……

※このインタビューの続きは、『Suburbia Suite presents 渋谷カルチャー考現学』と題して新たに制作されたZINEでお読みいただけます。

